はじめに――「議論の本位を定める」（『文明論之概略』第一章）

福沢諭吉は、明治期に日本を西洋のような近代国家にしようと奮闘した人物として知られています。それゆえこれまで福沢の思想は、西洋からの影響を中心に考察されてきました。また日本という国家が新しく進むべき方向について考えたことから、国家に関する彼の議論が主たる分析の対象とされてきました。しかし天保五年一二月（西暦では一八三五年一月）に生まれ、明治三四（一九〇一）年に亡くなった福沢は、その生涯のちょうど真ん中に明治維新をはさみ、前半は武士、後半は文明化を進める知識人として生きたのです。それにもかかわらず、これまでの研究では福沢の明治期の活動が中心に扱われ、彼が武士として生きた時代の影響についてはあまり重視されてきませんでした。

しかし、前半生を江戸時代の身分制の中で武士として生きた福沢が、新しい時代に向かうにあたって、いったいどのように西洋について学び、どのように日本を近代化させようとしたのでしょうか。古い社会を新しい社会へ転換することについて、彼はどのように考えたのでしょ

うか。本書はそれを解明するために、幕末から明治にかけての福沢の思想の変化を中心に考察します。

福沢は、一生をかけて近代的な国家を作るために必要だと考えるさまざまなことについて考察し、論じました。それゆえ彼の思想については、多様な視点からの考察が必要ですが、本書では、彼が新しい時代において人間そして社会はどうあるべきだと考えたのか、つまり社会構想に焦点をあてて論じようと思います。

福沢は、江戸時代から色々な経験をする中で、個人や社会のあり方について考えましたが、そこには江戸時代のさまざまな要素が影響を与えています。その中で注目すべきは、江戸時代に人々の生活の基盤だった「家」つまり家族という集団も、彼の社会構想における考察の対象になっていたという点です。福沢は、生涯「一身の独立、一家の独立、一国の独立、天下の独立」を実現するために努力しました。西洋の近代社会を分析する政治学の枠組みでは、家族と国家は「私的領域」と「公的領域」とに分けられ、「私的領域」である家族は社会構想から排除されて、考察の対象とされることはありません。そして福沢が明治期になってからは国家を中心に論じたために、もともと彼の基本的な社会構想には国家と並んで含まれていた家族が、後世の研究者による考察の対象から省かれてしまうという状況が生まれました。本書ではそう

した偏りをなくし、彼が家族も含んだ形で、どのように社会を構想したのかを示したいと思います。それは、福沢が男女の関係をどのように考えていたかにも関わってきます。

もうひとつ重要なのは、福沢が若いときに武士の基本的教養である儒学をかなり深く学んでおり、それが彼の社会構想に影響を与えたという点です。本書は、福沢が若い頃学んだ儒学の思想枠組みを基礎として持ちながら、西洋の思想を学んでいったという解釈を採ります。なぜそのような解釈に至ったかは、私のイギリスでの経験が影響しています。

私は一九九〇年から子どもを連れてイギリスで海外研修をしながら、福沢に関する博士論文を仕上げようとしていました。ある日子どもが学校から手紙をもらってきたのですが、それを読んだ私は、そこに書いてある英語をすべて日本語に訳すことができたにもかかわらず、その手紙が何について書いてあるのか、まったく理解できませんでした。結局それは、最近日本でも行なわれているような、子どもがある目標を立てて、それを達成したら親がチャリティーに寄付をするという活動のことだったのですが、このようなチャリティーの概念を当時知らなかった私は、英文の意味する内容がまったくわからなかったのです。

これは私にとって衝撃でした。この経験から私は、外国の事象を理解するためには、こちら側もその事象に対応するような概念枠組みを持っていなければならないということを悟りまし

た。福沢は「文字は観念の符号」と述べていますが、こちらがその「観念」を受容する素地を持っていなければ、「符号」としての外国の「文字」を見るだけでは、外国の「観念」は理解できないのです。

それまで私は、福沢の家族論を中心として、彼が西洋の思想を直接受け入れ、それを基本として自分の思想を作り上げたのだという仮説にもとづいて論文を執筆していました。しかしこの出来事によって、福沢が西洋を理解するためには、彼の中にその受容と理解を可能にする概念枠組みがすでにあったのではないかと考えるようになりました。そして、はじめから彼の思想を読み直した結果、その概念枠組みは儒学だったという結論に至ったのです。こうして再び福沢の思想を儒学の枠組みにもとづき読み直し解釈し直した結果が、本書の内容ということになります。

福沢は儒学の枠組みを持ちながら西洋の思想を学びました。その過程で東西の思想はどのように響きあい、どのような変化がもたらされたのでしょうか。本書では、新しい時代の個人と社会のあり方について、福沢が最も重要だと考えた「独立と自由」を軸に彼の思想の変遷を分析し、福沢が新しい社会において何をめざしたのかを解明したいと思います。